

街場の就活論 vol.15

～新卒採用とキャリア教育に関するハナシ～

だん あそぶ
団 遊

親の力か、子の力か ～夏のインターンシップを終えて思うこと～

僕が講師を務める APU (立命館アジア太平洋大学) では、今年も多くの学生が夏休みにインターンシップに行き、様々な手ごたえや悔しさを抱えて帰ってきた。

僕も担当教員として学生がお世話になっている企業を訪問し、ヒアリングをすることがあるのだが、多くの企業の人事担当者は日本人学生のひ弱さ(草食系)を嘆く。APU は全校生徒の半数が留学生という特長を持った大学のため、話題も自然とそういう話になることが多い。

授業をしても、アグレッシブさという面では留学生のほうが高いと確かに思う。しかし、果たしてそれは本当に学生の資質によるものなのか?とも感じている。

授業では、キャリアインタビューというワークを重視している。これは、様々な社会人の働き方や考え方のバリエーションを知ること、自分のそれを見つけていく助けにすることを目的としたワークだ。手始めに必ず両親へのインタビューをさせている。

年表式に相手の経歴をまとめ、キャリア感に影

響を与えた出来事や、キャリアチェンジの理由などを聞いていく。そして、それを A3 の指定用紙にまとめ、相手の許可を得て持ち帰る。全学生が行うので、かなりの数のキャリアシートが集まる。

学生はそれを相互に見せ合いながら、様々な人生のバリエーションを知っていく。その中で、憧れや反面教師を探し、自分なりのプランを考えていく。

* * *

手元に、あるベトナム人留学生が両親に対して行ったインタビューシートがある。この学生は、インターンシップ先から非常に評判が良かった。

「本人が希望すれば採用させていただきたい」と担当者からコメントが寄せられるくらいだった。その理由は、「日本人学生にはない食欲さと、主体性、オリジナリティあふれる考え方がある」というものだった。

インタビューシートによると、彼女の父は、学卒後、軍隊に入隊している。そこで挫折をし、大学院に再入学、苦勞して卒業後、外資系の企業で働き、実績を残しそれなりのポジションに上り詰め、

今に至っている。

母は政治家になりたかったようだ。しかし様々な事情がそれを許さず、学卒後、それならばと教師になった。今も教師を続けており、その理由を「国を支えるため」「自分で国を変えられないのなら国を変えられる人を育てたい」と言っている。

その両親から生まれた子が、「日本人学生にはない食欲さと、主体性、オリジナリティあふれる考え方がある」と称されている。

果たしてこれは、本当に学生の資質によるものなのだろうか？ もちろん本人の努力もある、しかし特に学齢期までは環境要因で育まれる部分も大きい。

一方で日本人学生が行った両親へのインタビューシートを見てみると、総じて、そのシートから夢を感じることはない。

少し厳しい言い方になるが、部分最適を積み重ねて今に至っている印象が強い。景気もまだ良かった時代に、とりあえず就活をして、社内でそれなりに奮闘し、それなりに上手くやって、もちろん個人的に大変なこともあったけれど、ソツなくこなして今に至る。

その両親に育てられた子が、「草食系」だ「夢がない」だ「受身」だと社会から非難されている。果たしてこれは、本当に学生の資質によるものなのか？ もちろん中には「とんびが鷹を生む」ことはある。しかし、そのような言葉が生まれる背景には、普通「とんびは鷹を生まない」という事実があるからだ。

私にも子どもが二人いる。別に鷹になって欲しいわけではないが、まずは自分が誇れる仕事と生

き方をしていかないと、子どもがそのような生き方をする可能性は低いと見ている。「草食系で夢がなく受身」だといわれる学生は、それを生んだ世代の生き写しであるという面もあるのではないか？

様々な国籍の学生が提出するインタビューシートを眺めながら、ふとそんなことを思った。

文/だん・あそぶ

立命館アジア太平洋大学非常勤講師

「街場のキャリア論」と題して、インターンシップを軸(実習)にした授業を展開している。代表をつとめるアソブロック株式会社では、幼保の環境づくり支援事業を行っている。ほかに出版社、はちみつ屋、アパレルブランド、島興し、地域活性など、多数のプロジェクトに取り組んでいる。